

稲作、新時代へ



積雪前の11月に播種している

これまでの常識を覆す、稲作の新たな栽培体系が普及し始めている。その名も「初冬直播き栽培」だ。10月中旬から12月上旬ごろに通常の倍量の種もみを直播きし、翌年春に萌芽、その年の秋に収穫するもの。集中する春作業を分散し、大規模化が進む担い手の労働力不足解消や規模拡大への後押しにつながる技術として、今後の動向から目が離せない。

広がる「初冬直播き栽培」

11月に播種、春作業分散に効果

青森・弘前市 ミウラファーム津軽



今年の秋を笑顔で情報交換する三浦さん（左）と及川研究員

分かかるような離れた圃場を中心に導入し、春にトラクターや田植機を移動する手間も大幅に減ったという。

導入のきっかけは、10～15年にさかのぼる。規模拡大が進む中、三浦さんが着目したのが直播きだ。無人ヘリで灌水直播を始めること、種いた種もみより早く出芽し、勢い

青森県弘前市で水田約85haを経営する三浦ミウラファーム代表取締役社長三浦裕行さん（49）は、この技術を取り入れた第一人者だ。昨年は10haで実験、三浦さんは「年々、預かる田んぼが増える中、春作業を分散できるのは大きい。収量も10月の田植えに比べ、良い同等以上になった」と笑顔を見せる。三浦さんは11月上旬



下野教授

句にかけて播種。出芽は5月中旬で、生育はだいたい5月下旬田植えの稲とそろそろ。除草は、出芽前の5月上旬に非選択性の除草剤処理を散布するなど通常の乾田直播と同機だ。事務所から車で30

分かかるような離れた圃場を中心に導入し、春にトラクターや田植機を移動する手間も大幅に減ったという。

同技術の研究・確立を進める下野教授によれば、現在、導入農家は約25軒、40haを超えている。地域も広がり、北海道や東北に加え、新潟県など北陸の農家でも導入。農家が出てきた。試験では、三重県や広島県、福岡県でも10～11月播種を成功。関東でも導入可能。各地域から、問い合わせが増えているという。雪が降らない地域では2月に播種する農家もいる。

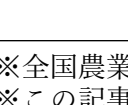
下を大層に下向ると種は死ぬが、積雪があれば、地温は10℃以上が保たれる。ほかにも発芽率向上のポイントとして①キヒゲンリーフフロアブル（米糠化学）などによる種子コーティングの薬。②冬した種子の吸水を促し、発芽させる春の土壌。③冬した種子の吸水を促し、発芽させる春の土壌。④冬した種子の吸水を促し、発芽させる春の土壌。⑤冬した種子の吸水を促し、発芽させる春の土壌。

全国で試験進み北陸でも導入

新規投資ゼロで規模拡大が可能

十分に苗たち数を確保できた。三浦さんの圃場の調査を続ける同センター作物部の及川隆子研究員は「春の直播きには、春の直播とはほぼ同等数が出芽し、同70%を取った。16年秋からは、下野教授や青森県産業技術センターと協力し、試験圃場を重ねた。現在の発芽率は50%以上まで向上。通常の直播より倍量の同10%の播種

基本的には新たな機械は不要だ。今までの作業で済んだ時期に作業できる。で、これまでと同じ人数で作付面積を増やせる。下野教授は「新規投資ゼロで規模拡大を推進できるのが売り。生産現場では、急速に地域を支える担い手に、圃場が集まり、負担は増している。多くの担い手の皆さんに知ってもらうため、経営の選択肢の一つとしてもらえれば」と話す。21年4月には「初冬直播研究会」を立ち上げ、ホームページ（二次元コード参照）でもさまざまな情報を公開している。



もさまざまな情報を公開している。

※全国農業新聞 令和5年2月17日付/農政面
 ※この記事は全国農業新聞の許諾を得て転載しています。
 ※無断転載・複写を禁じます